

山陽放送社長賞

カメはいい

岡山市立足守小学校

六年生 緒方直昭

四月に、一匹のカメが六年教室へやってきた。生き物係のぼくは、前から空っぽの水そうを何とかしたかったので、カメは大かんげいだった。それにみんなも、水そうにへばりつくように見ていたから、うれしかったのだと思う。

そして、そのカメについて調べているうちに、色々なことがわかった。種類はクサガメで、目がよく、三日間くらいなら何も食べなくても大丈夫らしい。エサは市はんのものがある。

次の日、杉本君にカメに仲間をつくってやろうとさそわれて、新たなカメをつかまえに、足守川に行った。なかなか見つからなかったが、川に入って一時間ほどで、一匹ひき目のカメをつかまえた。これもクサガメで、二十センチをゆうにこえる大きさだ。そして二匹目のカメも見つけた。これまたクサガメで、ハセン

チぐらいの小ささだった。大きい方のカメの足に、寄生虫がたくさんはりついているのを発見して、枝でこそげて取ってやった。取っても取っても中から出てきてきりが無いと思ったが、しばらくして出てこなくなったので、よかったと安心した。

その後、学校の水そうにカメを入れて、計三匹になった。カメの名前は、一番小さいカメに「ゼニガメ」、最初にきた中ぐらいのカメに「カメール」、一番大きなカメに「カメックス」とつけた。

水そうの中で、カメたちは、カメール、カメックス、ゼニガメの順番で重なっている。中ぐらいのが一番下なので、見ていて落ち着かない。しかも、三匹とも気に入った場所が、水そうの右側の手前一か所だったので、いつもきゆうくつそうだ。しかし、移動させても元通りの場所へ動いていってしまうから、カメたちにはそこが一番落ち着くのだろう。

カメには、「おか」というこうら干しをする場所がある。こうら干しとは、こうらに日光を当てて温まる日なたぼつこのよなものだ。これをしないと、病気になるらしい。しかし、学校の水そうは、高さがありなのでおかを作れない。水そうから落ちてしまうかもしれない、危ないのだ。なので、たまに三匹をバケツで運動場に運んで、こうら干しをさせる。カメも気分が良くなるのか、てくてくと歩いていくから、

見ても楽しくなってくる。持ち上げると、ヒュッと頭と足を引っこめて、安心するとまたのーっと頭と足を出すので、おもしろい。

ぼくは、カメのおっとり感が何とも言えず好きだ。たいていのことは、「まあいいさ。」と受け入れているような心の広さを感ずる。首をゆっくりこっちに回して目が合うと、何だか話ができそうだ。

しばらくたって、ゴールデンウィーク中に、ぼくは大変なことをしてしまったことに気づいた。休みに入る前に、エサをやり忘れてしまったのだ。三日間なら大丈夫でも、五日間はどうかかわからない。生き物系の他の人が、やってくれたかどうかもわからない。なので、もしかすると、五日間何も食べていないかもしれないのだ。きっとお腹がすいて、今ごろ苦しんでいるだろう。もし死んでしまっていたらどうしようと思うと、夜も眠れなかった。休み明けの月曜日、急いで学校に行った。「早くえさをやらないと。死んでいませんように、死んでいませんように。」と念じながら水そうまで行くと、カメたちは生きていた。

「よかったあ。」

ぼくは、心底ほっとした。えさをやったら、すごい勢いで食べた。だれかがえさをやっておいてくれたのか、カメは五日間

でもたえられるのかはわからないが、とにかくよかった。ぼくは、こんなむごいことは、もう二度としないと心に決めた。

ある日、水そうの中にたまごがあった。四センチくらいの細長いたまごだ。三匹のうちどれが生んだのだろう。でも、本来、カメは陸地でたまごを産むらしいので、水中で産むしかなくていやだったと思う。

一学期が終わり、カメとの別れの日がやってきた。杉本君と中野君とぼくで水そうを洗い、黒ずんだ所や藻などをきれいにした。それからカメをにがしに行った。三匹のカメは、せまかった水そうを出て、足を大きく動かして、気持ちよさそうに泳いでいく。カメは泳ぐとめちやくちや速いと思った。これからも大きく成長していくのだろうとぼくは感じた。

たまごは、ぼくが預かって帰った。ネットで調べて、バケツに砂を入れて、半分くらいまでうめて、直射日光の当たらないえん側の下に置いた。人工ふかはとても難しいらしいが、うまくいくと二か月でふ化するそうだ。朝晩見ているけど、今のところうんともすんとも言わなくて不安だ。けれど、時々、しめり気もあたえてやる。カメックスたちの残してくれたたまごだから、明日もちゃんと様子を見に行くぞ。